

芥川氏の即興歌

薄田泣菫

今日古手紙を整理してみると、偶然芥川龍之介氏から私へ宛てた即興歌の書簡二通と発見した。さきに岩俣書庫が同氏の全集を計畫した次第、その書簡集の材料にと、誘はる子がままた手紙とに残存してある同氏の手紙は、すうかり纏めて送つたつもりであつたが

、これでみると、押し流れてもあつたものと思はれる。芥川氏は手紙の末尾によく俳句や歌の二つ二つを書き添へる癖があつたが、この二通の手紙は、全く即興の歌づくめなのが一寸變つてゐる。支那旅行から歸つて来て、大阪毎日に毎日連載する支那遊記が、いかにかすくと中絶かちぢるもので、その度に私から催促する。それに返事としてようたものな



Handwritten notes at the top of the page, including 'p 37' and 'No. 1'.



↑その一

急げつつありと思ふな文債に  
こもれる我は安けからなく

あかうひく書もこもりて文書けば

さ庭の櫻ふみそめけり

去年の春見し長江の旅日記

げわ書さしかばやかて送らむ

旅日記とくかきと云ふ君の文

見のつらければ二日見ずけり

神経衰弱癒えずぬば玉の

夢のみ見つつ安いせずわれは

二伸

マガジンセクシヨンへはえの中にか書

きます何しろ方々の催促にやりやれぬ故

けわ鶴沼に踏晦し二三日静養し上止記



行なびマガジンセクションへ取りかかり  
ます

芥川龍之介

その二

即席歌

原稿を書かねばならぬ苦しさに

~~疲~~ すらむ我をあはれと思へ

雪の上にあり来る雨が原稿を

書きつつ聞けば苦しかりけり

「甘酒」の鉄は近し然れども

「支那・旅行記」はやまむ日知らに

寸庭べの草をともしみ椽にあれば

原稿と書く心起らぬ

作者、秋の泣く泣く書ける旅行記も

読者、君にはおかしかるらむ



赤玉のみすまるの玉の美<sup>は</sup>し乙女  
 愛で讀むべくは常<sup>は</sup>み<sup>て</sup>書か<sup>な</sup>む  
 友那紀行書きつつをれば小説が  
 せんすべし<sup>ら</sup>に書きたくなるも  
 小説を書きたき心保ちつつ  
 唐土日記をものする我は

泉穂を書かねばやうぬ苦しさに  
 入日見る心君知ら<sup>う</sup>む

のんきなるA、K論とする博士  
 文章道<sup>を</sup>知<sup>ら</sup>ず昇<sup>し</sup>も

薄曇るちまたを行けば心うれ  
 四百の金も既にあま<sup>ら</sup>ず

澄江堂主人



二伸

一作ボクの遊記をよんだらにつけてもい  
いのですか読者の方あんな物は早くよめ  
と言ひはしませんか（云へばすぐによせ  
るのですか）評判よろしければこの評判  
をつつかに構に書きまする可く評判を  
おせかせ下さい小説家とジャーナリストと  
の兼業は大役です

これとみると、芥川氏の「支那遊記」がい

かに遊々たりながら書かれたりするのであるかがよ  
く判るだろう。「甘酒」といふのは「遊記」と  
同じ頃に大阪毎日の紙上に連載されてゐた  
某作家の創作の名。「A、Kを論ずる博士」  
は、誰のことを指したのか、今は記憶に乏  
しい。「四百の金」は芥川氏が旅行を終つて東京  
に歸つた後、新聞社の會計部より氏に送つ  
た旅費の残りで、氏がその書解つておられは甚う  
てもいいのですか、何だか後がおそろしいや  
うな氣持がする」と言うてゐたものだ。